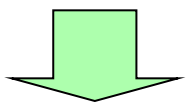


四万十市中心市街地活性化基本計画 (計画期間 20年7月～25年3月)

【中心市街地を巡る状況】

- 日本最後の清流「四万十川」などの地域資源があり、H18は約86万人の観光客
- 相次ぐ大規模店舗の立地により中心市街地が衰退傾向

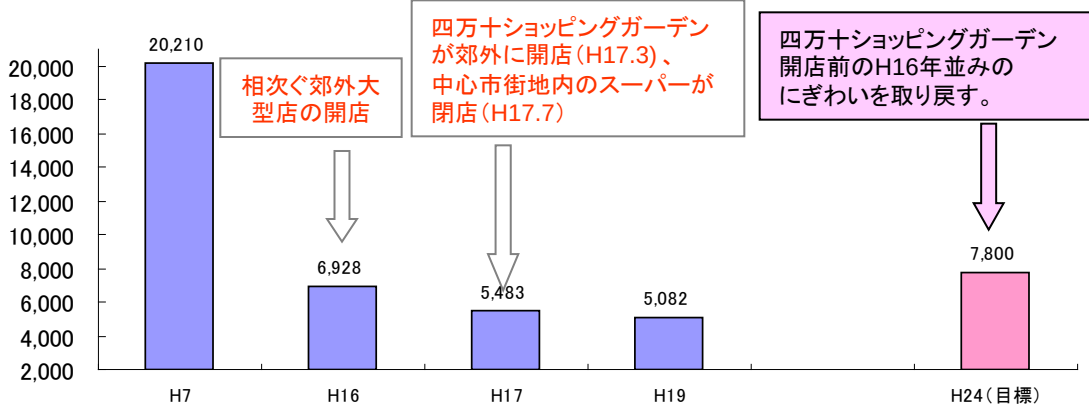


- 歩行者通行量(平日と休日の平均値)
H7: 20,210人 → H19: 5,082人(△75%)
- 宿泊客数
H7: 227,493人 → H18: 133,877人(△41%)
- 居住人口
H7: 9,356人 → H19: 7,701人(△18%)
- 小売業年間商品販売額
H8: 25,946百万円 → H15: 14,817百万円(△43%)
- 空き店舗率
H15: 14.8% → H19: 20.3%

【目標】

目標	指標	現況値	目標値(H24)
賑わいと回遊性のあるまちづくり	歩行者・自転車通行量	5,082人(H19)	7,800人
	観光入込み客の宿泊客数	133,877人(H18)	138,000人
安心・安全住みやすいまちづくり	まちなか居住人口	7,701人(H19)	8,000人
商店街の再生による魅力あるまちづくり	小売業年間商品販売額	13,667百万円(H19推計値)	13,800百万円
	空き店舗率	20.3%(H19)	19.0%

(歩行者・自転車通行量の動向と数値目標) * 平日と休日の平均値。12月に定点調査



四万十川の自然はそのままに、中心部に物産館や飲食店街等を整備することにより、来街者への質の高いホスピタリティの提供と地域経済の活力維持の両立を目指す。

四万十市中心市街地活性化基本計画の事業概要

賑わいと回遊性のあるまちづくり

○ 中心部への中継基地(物産館)の整備

交通量の多い国道沿いの国民年金健康保険センター跡地において、物産の販売や地元食材を使用した大型レストラン等を整備し、観光客の取り込みを図る。



○ 中心部への回遊性向上

物産館を拠点にレンタサイクルを活用して、商店街や街なかの小京都らしい歴史資源等を巡るスタンプラリーを実施。



物産館や駅から、中心部のホテルを経由して観光地までフリー乗降可で周遊する「四万十川周遊川バス」の利用促進。



○ 年間を通した賑わいの創出

四万十川の冬景色、幻想的なシラスウナギ漁といった冬の風物詩を体験した後、冬の時期しか味わえない落ち鮎を使った塩茹の体験メニューの開発等、冬の観光強化。



商店街の再生

○ 飲食店街の再整備

飲食店街の一角を新たに屋台村として整備し、隣接する既存飲食店の改修も併せて実施。



○ 食育広場の整備

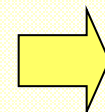
地元素材を使った、「食育」の啓発や地元の産直市(物産や惣菜等を販売)を行う交流拠点施設を整備



暮らしやすく住みやすいまちづくり

○ 図書館の改築

老朽化した市庁舎の建て替えと併せて図書館を2階に整備し、郷土資料展示コーナーの設置や来街者用駐車場を拡大(収容台数約3倍)



○ 東下町会館の改築

郵便局、24時間託児所、障害者の作業所、多目的ホールを併せもつ施設を整備



○ 高齢者向け共同住宅やおみやげ屋等の商業施設の一体的整備

○ 移住促進事業

全国的に有名な「四万十川」等の地域資源を活かして、大都市で開催の就職フェア等に参加し、U・I・Jターン者や団塊世代等を対象に、移住促進を図る。

